

別世界の御杖村

2月5日 健生会山歩きクラブの例会登山は奈良県御杖村の三峰山だった。インフルエンザ等でのキャンセルが相次いだり、参加費値上げ諒承の上で17人で出発。天気は曇り。

バスが榛原駅から内牧に上り始めるとあたりは雪景色となっていき、トンネルを抜けて御杖村に入ると、そこには大和平野とは全く違う銀世界が広がっていた。国道で除雪車が懸命に作業している。

事前に「トイレ拝借」の了解を得ていた御杖村役場に着いたのは8時過ぎで、まだしまっているかと思いきや、職員総出で雪かきをされていた。

緊急多忙にもかかわらず、役場職員の親切な対応に感謝して登山口へと向かった。



アイゼンが壊れた

登山口の青少年旅行村も深々とした新雪に覆われており、全員アイゼンを装着して登山開始。と思ったら



私のアイゼンが故障、前後を連結しているスライド式の鉄板が外れたのだ。休憩した避難小屋で参加者の一人が携行していた予備のアイゼンをお借りして登ったが、それも途中ではずれて紛失したようで、下りでは何回も滑ってしりもちをつき、元々故障もちの左ひざをまたもや痛めてしまい、パーティーに迷惑をかけたしまった。

予備のアイゼンを

こうした不測の事態に備えてアイゼンのスペアを携行すべきなのだ。今後の教訓としよう。

「戦争体験」を語る

過日、健生会看護師長室から「新任看護師の研修で、戦争体験を語ってほしい」との依頼を受けた。私は戸惑った。私は1941(昭和16)年生まれで、当然戦闘参加の体験はなく、空襲を受けた経験も無いのだ。

何かの折に、私が中国からの引揚(ひきあげ)のことや、戦後間もなくの長崎市の状況などに触れたのが、尾ひれをつけた形で伝わったのだろうか。

日本近代史の研究者に相談したところ、「戦争体験を語る人は少なくなっており、次の世代が引き継がねばならない。引揚は戦争体験の重要な課題であり話すべきではないか」との助言をいただいた。

この助言に背中を押されて、話す内容をまとめだしたが、引揚当時5歳だった私には断片的な思い出しかなく、6歳上の長姉に聞き取りをし、亡き父が厚生省あて提出したと思われる「引揚者在外事実調査票」に基

づいて、記憶をつなぎ合わせた形になった。

結局「引揚」については、すでに明らかにされている資料や記録、引揚者の体験記などの紹介を主とし、それに私たち一家の体験を加える内容としたが、私にとって「満州からの引揚の悲惨さ」を改めて学びなおす機会になった。

もう一つ私が伝えたかったのは、戦後しばらく続いた食糧難の中で味わった「飢餓」の経験だった。国内食料の絶対量が不足した中で、裸同然で引き揚げてきた家族7人の食料を確保することは両親には至難のことだったに違いない。ひもじくて惨めだった。栄養失調で体中にこぶのようなできものが噴出し、その痛さ、痒さに苦しめられる毎日だった。思い出すのも嫌だし、二度と体験したくないが、子供心にも「戦争は絶対いや」の思いを強くした実体験なのだ。

さらに私が時間を割いて話したのは、「原爆許すまじ」の思いだった。私は被爆者ではないが、幼少期から青年時代を爆心地の近くで過ごした。周囲にも、友人にも、恩師にも被爆者が居たし、「原水爆禁止」運動を粘り強くつづけている人たちも少なくない。こうした努力が国連での「核兵器禁止条約」成立の成果を勝ち取ったのだ。

そして最後に、私は日本国憲法の有難さ、大切さ、世界に誇るべきものであることを強調した。

続・二上山に咲く花々 45

フジウツギ(藤空木)

フジウツギ科(新分類ではゴマノハグサ科)

フジウツギ属 写真は澤木博さん

何年か前、二上山雌岳西側山腹で咲き誇るように花を着け、その名を何人もの人から尋ねられました。その後見なくなったのですが、昨年9月南に隣接する岩橋山との境の数カ所で咲いていました。

明るい場所に自生する小低木。6～9月ピンクの小さい花を房状にたくさん咲かせます。その様子と色が藤に似るからこの名に。ブツテリアと呼ばれる花もこの仲間。



続・二上山に咲く花々 46

ヤマシロギク(山白菊) キク科シオン属

写真は澤木仁さん

花期は9～11月。花が少なくなる秋、二上山でも日当たりのよい場所で花を開き、登山道を飾ります。高さは50～80cm。花は直径2cmほど。

晩秋に咲く野菊の仲間はいずれもよく似ており、しかも交雑種もあって区別が難しく、さらに名前も紛らわしくて、尋ねられても困ってしまうことがしばしばです。